



TITLE:

追憶文財部先生を偲ぶ

AUTHOR(S):

黒正, 巖

---

CITATION:

黒正, 巖. 追憶文財部先生を偲ぶ. 経済論叢 1940, 51(2): 258-262

ISSUE DATE:

1940-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/131411>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 經濟論叢

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭

故財部教授遺影署名及原稿

## 論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助  
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

## 時論

東亞新秩序建設と新國民政府<sup>の發展性</sup>……………文學博士 矢野仁一

## 研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行  
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

## 記事

財部教授逝く

故財部教授年譜及著書論文目錄

## 追憶文

神戸正雄 本庄榮治郎 蜷川虎三  
木村喜一郎 吳文炳 宗藤圭三  
青盛和雄 松岡孝兒 石川興二  
黒正巖 藤本幸太郎 谷口吉彦  
岡崎文規

## 附錄

## 彙報

外國雜誌論題

## 財部先生を偲ぶ

黒 正 巖

大正八年に我が京都帝國大學經濟學部が新設され、種々の新しい科目が出来たが、その中に經濟地理といふのが設けられるといふ話であつた。私は新入生の時から本庄先生に就いて經濟史の研究を試み、卒業後も日本經濟史を専攻する心組であつたが、戸田海市先生

の下に出入してゐる間に、戸田先生のいはれるには、「本庄氏は現代の西陣の研究から出發して日本經濟史を大成しつつあるが、君は一つ支那問題から初め、且つそれには經濟地理の研究が必要であるから最初は専ら經濟地理をやつては如何」と先生獨特の空間と時間の問題を論ぜられ、經濟史と經濟地理とが研究上の密接不可離の關係にある事を説かれた。それで私の大學院研究テーマは經濟地理となつた。而してこの經濟地理を新經濟學部の一科目たるべしと主張されたのは、實に財部先生であつたといふ事である。私の指導教授の一人は戸田先生であるべき筈だが、先生は御病氣で殆ど大學には當時出席されなかつたので、財部先生と文學部の石橋五郎先生とであつた。財部先生には統計學と保險學との講義を聴いたが、認識不足の私は財部先生が地理學の大家であるとは實はよく知らなかつた。

指導教授になつて頂いたので御挨拶に出かけた。當時は眞如堂の前に御宅があり、玄關口からどの室も古

めいた本が積み上げられて居り、今にも家がひつくり返へり相に思はれた。その時のお話では先づ獨この地理書を讀む事、それから支那印度に關するものを讀めとて澤山の文獻をあげられた。リヒトホーフェンやバーデンバウエルの名もその時に初めて聞いた。博覽強記なのに先づ面くらつた。そして私に手交されたのが Alfred Hirschhof の Mensch und Erde といふ Aus Natur und Geist 叢書中の一冊であつた。爾來私は先生の御宅に出入する事屢々にして地理學上の多大の指導を受けた。併し私の不敏は必しも先生の指さるゝまゝに勉強もせず、今日に至るも地理學と經濟史との聯關を一元的にまとめ上げる丈けの力を涵養する事は出来なかつた。けれども先生の教へられたる地理學が私の經濟史的研究に對し目に見えざる基礎となり原動力となつてゐる事は、私の深く感謝してゐる所である。

私が大正十四年に外國から歸つた時には先生の奥様が他界されてゐた。私の出入の度は益々多くなつた。種々の文獻については早速かけつけて御伺ひしたの

であるが、そんな場合に先生は、「あゝそれか、それならこの本の茲にある」と實に掌をさすが如く明示して下さる。怠者の私は一々文獻を検索するよりも、先生の所へかけつけた方が早いので屢々かゝるするい研究方法をとつた事もあるので、今更乍ら相すまぬと汗顔の至である。

多くの人は先生の片々たる外的行動を以て、又その言説を以て先生を論じ、眞の先生を評價せざるものも少くない。又先生はジャーナリズムを最もきはれた。故に大衆には喝采されなかつた。併し人若し個人的に相對し古今の學につきて談ずるならば、先生が如何に偉大なる學者であり、學問即生命の生活をされたかといふ事に感服するであらう。甚だ生意氣な豫言をするようであるが、百年の後に尙ほ後生の學者が斯くの如き學者が京都の一天地にありしかと驚くのは先生の、現代を超越したる論者であると、私は信じてゐる。

先生は亡き奥様を心より思慕されてゐた。奥様のなくなられたのは先生未だ四十四五歳の時であり、御子

様も小さいのが澤山あつたが、最後迄獨身を守られた。先生を訪問して家の内を見る度に涙のこぼれる思ひをした。先生は机の引出しに經節と切出を入れておき、その側に火鉢をすゑ、それに燗瓶をかけてお酒のお燗を一人でやりちびり／＼と味ひ乍ら讀書三昧にふけられた。興が乗ればその状態が數日も續くといふ有様であつたから、之が先生の健康を害する原因であつたと思ふ。又好きな男が來たり、よい酒が到來すると痛飲されたものである。それも先生の奥様に對する苦悶のはけ場であつたらう。それがあらぬか時々大病になられるので、禁酒させる以外の方法がなく、無理／＼に病院に入れた事が屢々あつた。病院にあれば酒も吞めず煙草もすへぬので二週間もすると相當に閉口されたらしく、私に電話がかゝつて來て連れ出しに來て呉れとの歎願である。すると私は、禁酒なされは今日の日にでも退院出來ますといふと、先生は正直だから、或は又吞むかも知れぬのに只出度いために吞まぬとはいはぬといふのが先生の常の語であつた。先生の正直

さは之れでも分る。

先生が酒が好きであつた事は茲にいふ迄もないが、好きといふよりも酒仙に近い方であり、興がのれば夜を徹して呑まれた。併し茶屋酒がきらひで、長い間御世話になつたが、先生とは一度も茶屋に行つた事がない。主として自宅でのみ、時々散歩の序などにすき焼屋、煮賣屋、おでんや、處選ばず出入し、時には數軒となく、ブンメルのがお好きであつた。その長時間に互るのには大抵の人が尾を卷いた。吉田山に東洋花壇といふのがあるが、一時よくあそこへ行かれた。行かれると女中さんが必ず私の所へ電話をして先生が直ぐ来いとの事だとある。當時私も元氣で、下地は好きなりと大概出かけた。すると女中が手を合はせて、「どうか今夕は早く御連れして歸つて下さい、お願いします」といふが常だつた。時々私が他の人とそこへ行つた際には、「サーピスが悪いと先生を呼ぶぞ」とよくからかつた。先生の長尻以て知るべし、先生は何分にも天の邪鬼で、殊に酒で御きげんがよいと甚しくなる。いつ

だつたか北野天神の梅を見に行くとして二人で出かけた。當時私は禁酒してゐた。それで先生丈けちびくやつて居られた時に、酒は止めた方がどうもよいと、暗に先生に禁酒、節酒を説いたからたまらぬ。よし來たと計りに餘計に呑み初められた。そこで、私もそれならよろしい、今日限り禁酒は止めだ、大に呑まんとかぶく痛飲し初めたので、先生もびつくりし、もう歸らうといはれた。電車にのつて熊野神社前迄來た時私はまだく歸らぬ、之から町へ引つ張つて行くのだとやつた所、先生は心配して早く歸らうくと、私の手をとつて、家迄送り届けられた事がある。だから先生の酒を封ずるのにはこちらが先に酔つばらふのが、一番よいので、以來常にこの手を以て先生にのぞんだ。九州の森耕二郎君と三人で呑み歩いたが、何時はてるとも分らぬので、二人とも閉口したあげく、一案を考へ、先生よい所へ行かんと二人で先生の手を強引して膳所浦の中へ行き、お茶屋へ引き上げる格好をした所、先生は一目散に逃げ歸られて、姿が見えなくな

追憶文

つた。二人もそれから慌はてゝ歸つた事がある。

昔、神樂阪の邊を、黒眼鏡をかけ、和服にフェルト草履でばつた／＼と如何にも大道香具師然たる格好で歩かれた先生は、界限の名物であつた。そしてその頃ものされた論著はその時代を表徴する不朽の學問的珠玉であると思ふ。こゝ數年來、大徳寺の方へ引き越されたのを契機に私は出入を止めた。それは故意であつた。私が行けば、私を肴にして、折角節酒されてゐるのを破るチャンスとなるからであつた。思ひ出せば山々あれど、紙數に限りがあるのでこの邊で偲草の筆を擱く。